不安な旅行

油田敦彦

夜になると
凄じいばかりの嵐になり
空一面を　蒼い風が渡っている
サッフォーが稲刈りをしたのも
この時期の昼過ぎだったのだろうか
深い魂の水溜りを覗き込むと
杉苔などの地衣類に絡まって
アンドロメダの留金が
捨てられている〉
タンポポの種子のように
フワリとしているかと思うと
実際は時計の短針のように
堅牢であって
農夫の鍬や鋤のように
ピカピカしている
ゆっくりと開かれる窓のために苦悩する空
風がめくれる
鍵型の蝶の影が
紅色に濡れる頃

泥土にくるまれて眠れ
暴風雨の睫毛が
小枝のように揺れる
古代地図にあったビルマのパゴダは
海藻のようにそよぎ
生駒の山系は幻の形態
地表には極光のような
稲穂の鼓動がザワと揺れ
「キリコの脳味噌は矢張り淋しい　イカルガ以上に淋しくてカボチャのように空疎だ」
心臓の水脈を曳きながら
こんな迷信を想い泛かべるのは
イカロスがさかしまに堕ちた
海辺の美しい光景を
昼間に考えていたからだろうか
「秋の気配は牧神の午後の如くにおだやか」で
卵白から抽出された
バタイユの眼球を想い出す
イカロスの眼球が
太陽の灼熱に灼かれたのであれば
バタイユは背徳という精液で
眼球を潰すのであろう

歩く。
斑鳩を歩く
脳髄の内側を散歩するように
ウッソウとして
静かに歩く
法起寺は
ただ
少年の男根（ペニス）のように
テンとして佇んでいる